

[14] radix : 九州大学全学共通教育広報

<https://hdl.handle.net/2324/20379>

出版情報 : radix. 14, 1997-09-30. 九州大学教養部大学教育研究センター
バージョン :
権利関係 :

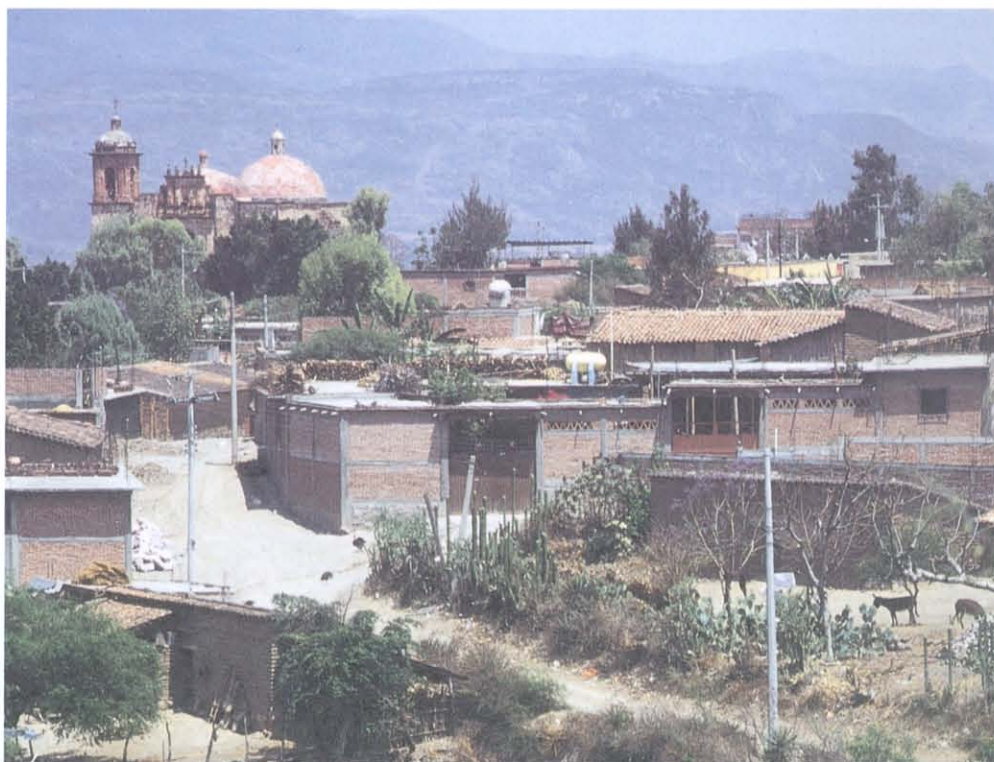


radix

radix(ラーティクス)は、根、根源を意味するラテン語。ヒトの根源にまなざしを向け、豊かなこころの根を広げたい。

1997 9.30

九州大学全学共通教育広報 No. 14



山麓の村 Sanbartolome 人口数百人の小さなインディヘナの村(11頁参照)

大学における言論と暴力……………押川 元重… 2
 公務員と国籍……………杉浦 實… 3
 第22回九州地区国立大学間合宿共同授業感想文
 その後のつぶやき……………古田 未央… 4
 田島寮祭……………中富 満城… 6
サークル紹介 6
 アーチェリーをもっと……………宇於崎善規… 7
 Go Blue!～アメリカ留学体験記～ ……福島 礼子… 8
 海外留学説明会の開催について……………留学生課… 9
 〈新任教官自己紹介〉
 Bradley Sinclair ・ 吉森 明……………10

メヒコへの旅……………中峰 貴子…11
アジアと日本
 韓国の伝統美……………申 鉉夏…12
 郭沫若と湯の原温泉……………武 継平…15
 中国映画の魅力……………日下みどり…17
 〈学生会館第34回文化講演会要旨〉……………19
インターネット社会の到来
 ーネティズンの時代の中でー 尾野 徹氏
 一冊の本……………押川 元重…23
 六本松地区教職員異動(省略)……………23
 あとがき……………24

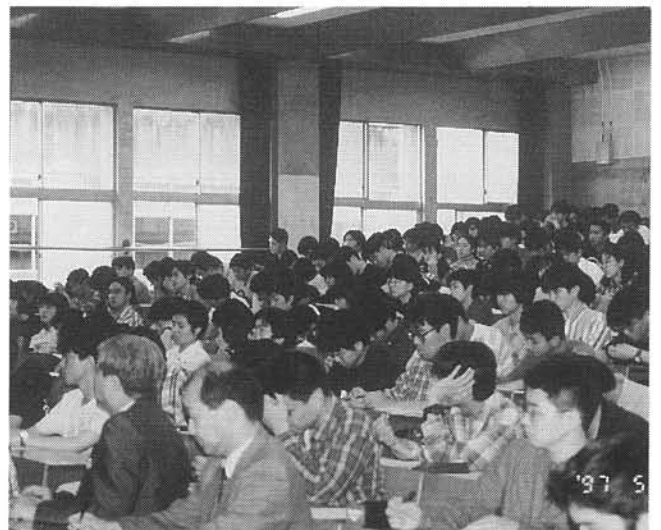
大学における言論と暴力

おし かわ もと かず
押 川 元 重

六本松キャンパスに置かれた大きな「たて看」にたびたび「撃滅」^{せんめつ}、「殲滅」^{せんめつ}という用語が書かれているのを見ると、人命にかかわる「殲滅」^{せんめつ}が実行されていることを思い出し、背筋が寒くなります。このような「たて看」の設置を大学は許すべきではないという意見も沢山あります。もちろん「たて看」が風に吹かれて倒れることなどの危険を考慮しなかったり、大学外に宣伝するために大学の場を利用することは認められません。しかし、学問の場としての大学はどのような異端の意見であっても言論の範囲である限り発表を許容することが必要です。大学においては発表そのものを抑えるのではなく言論を用いて批判すべきです。大学が言論活動を特に大切にするのは、教育と研究の場であるという大学の特質によるものですし、その時代のレベルを越えた新しい思想や理論が異端の名のもとで抑えられ、そのことによって学問の進歩や文化の発展が押し止められたという歴史の事例が少なくなかったことによるものです。ただし、異端とみられる意見が歴史の中で積極的な役割を果たすとは限らないことは勿論のことです。しかしそこに暴力の実行が伴ってくるとなると問題は別です。約20年前のことですが本学を含めて全国の多くの大学が「大学紛争」に荒れ狂ったことがあります。学生の中から大学や教師に対する不満や不信が出され、しかもそれらの中には当を得た

ものも少なくありませんでした。しかし、不満や不信が一部の学生による暴力行為へと転化することによって、大学は荒廃し、大学の改革改善への努力の多くが不毛に帰しました。暴力行為を黙認することによって大学は使命を果たすことができなくなり、大学の存立をも脅かすことになるわけです。したがって、大学内における暴力や暴力を背景とした脅迫に対して大学は毅然として拒否の態度を貫きますし、必要な措置を取らざるを得ません。しかし、先に述べたように、いかに異端で不愉快な内容のものであってもそれが言論の範囲である限り、言論によって対応するというのが、大学のあり方です。なお、暴力を背景とした脅迫が自由な言論活動を困難にするということもありますので、暴力行為の実施者に対してはそれを容認する者を含めて特に厳しい責任追及が大切です。

最後に最近発生した事件について簡単にふれます。さる7月7日、本学学生2名が傷害容疑で警察に逮捕されましたが、そのとき教養部学生自治会等の連名で出された「声明」は、自らの責任を考えるとなく一方的に「今回の学友への弾圧を導き出した大学当局」と記述しています。大学は構内で暴力事件を起こした集団に対して引き続きその責任を追及しますし、警察の家宅捜査に対しては一定の根拠がある限りそれを拒否することはできません。(大学教育研究センター長)





公務員と国籍

すぎ 浦 實

ことしの3月7日の新聞で読んだのですが、福岡県の麻生渡知事が県議会での答弁のなかで、在住外国人の意見を県政に反映させるために、外国人会議を新設する、と表明しました。これは現行法制下では精一杯の措置ではあるのでしょうか、外国人の意見がほんとうに県政に反映されるのかどうか、あまり期待できません。

日本では、外国人が公務員になることは原則として認められていません。近年、国公立大学の外国人教官が増え、喜ばしいことですが、これはあくまでも特例でしかありません。地方自治体のなかに、外国人を職員に採用しているところもあるようです。しかし政府は、法制上問題があるとして、これに難色を示しています。

オーストリア人であったアドルフ・ヒトラーがなせドイツの宰相に任命され、大統領に選ばれたのか、いままでふしぎに思っていました（官吏になるためにはドイツ国籍が必要でした!）。ところが最近になって、山本尤著『ナチズムと大学』（中公新書）を読み、やっとこの謎が解けました。

1932年の秋、大統領選に立候補するにあたって、ヒトラーにドイツ国籍がないことが問題となりました。むりやり官吏に就任すれば自動的にドイツ国籍が認められるという理屈から、ナチ党員でブラウンシュヴァイクの教育大臣であったクラークスが、ヒトラーをブラウンシュヴァイク工科大学教授に任命しようとした。学長の拒否にあってこれが不成功におおると、こんどは、ナチ党員のブラウンシュヴァイク内務大臣が、ヒトラーをベルリンのブラウンシュヴァイク公使館付補佐官に任命し、ブラウンシュヴァイクの市民権、したがってドイツ国籍を獲得させ、宰相任命（1933年1月30日）を可能にし、大統領選（同年3月5日）の立候補資格をも得させたのです。ちなみに、ブラウンシュヴァイク工科大学のガスナー学長は、その後ナチ党からさまざまな嫌がらせを受け、1934年には国外追放の処分を被りました。

ヒトラーは政権の座につくとすぐ、いわゆる「全権

委任法」を成立させ、無制限な独裁権を握り、ついで「公務員制度再建法」を制定しました。これによって、非アリア人（主としてユダヤ人）は公務員から排除されることになりました。大学からも多数のユダヤ人教授が罷免されました。ベルリン・ダーレムの生物学研究所の研究者オットー・ウルハン博士は、ユダヤ人ではありませんでしたが、母親が日本人だという理由で、やはり罷免の対象とされました（博士はのちに旧制弘前高等学校のドイツ語教師に迎えられました）。

ふたたび日本のことに話をもどします。公務員に外国人を登用することは、行政のあらゆる分野において、日本人には気づかない新しい観点と構想を導入するきっかけとなり、役所の内部に新風を吹き込んでくれるでしょうし、役人の天下りや汚職という悪弊の根絶にも一役かうことになるかもしれません。

一步すすめて、国会議員や地方議員にも外国人の立候補が認められれば、派閥争いや与野党のかけひきに明け暮れるいまの政界も、ずいぶんと様相が変わってくるでしょう。

公務員や議員に外国人を加えるには、もちろん法改正が必要ですし、資格条件を決めるにも難しい問題があることは承知しています。

日本の伝統的格闘技である相撲の世界では、はやくから外国人力士が登場し、土俵を賑わせています。他のプロスポーツでも、外国人選手の活躍が目立ちます。これを苦々しく感じているご仁もいるかもしれませんが、そういう人がかえって、ドジャースの野茂投手がアメリカの大リーグでノーヒット・ノーランを記録したと聞いて、快哉を叫んでいるのではないのでしょうか。

スポーツ選手と公務員や議員とをいっしょくたにするつもりは毛頭ありません。国際化が叫ばれるようになってすでに久しくなりますが、口先だけのスローガンにおわっています。日本は外国にたいしてガードが固く、いまだに鎖国状態から抜けきっていないと言えます。国際化を叫ぶのであれば、このさい思いきって国籍という壁をとりはらい、世界に広く門戸を開く勇氣をもってはいかががでしょう。（九州大学名誉教授）

第22回九州地区国立大学間合宿共同授業

その後のつぶやき

教育学部1年 古田未央

4泊5日はきっと長いだろうと思っていたが、予想通り始めの3日間はまだ2（あるいは3）日目か……とよく思った。しかし4日目からはあっという間に過ぎてしまった気がする。そうはいつても最初の3日間がつまらなくて残る2日間が楽しかったなどというわけではもちろんない。毎日いろいろなことがあり、それぞれの日に楽しかったりおもしろくなかったりしたことが詰まっている。以下ではこの合宿に含まれていたもののうち私の中で大きな位置を占める4つの事柄について感想を述べる。

1. 講義について

何とんでもこの合宿は合宿共同授業であるのだから、講義の感想をまず述べておいた方が無難だと思われる。

九大内での学習会で第1回目のオリエンテーションがあった時に言ったように、私がこの合宿に参加してみようと思ったのは「いじめと共生」という講義をぜひうけてみたいと思ったからであった。大学の講義で教育心理学と教育学の概説の授業をうけているが、いじめに関する話題は1度も出てこない。数少ない図書館の本や新聞で読むことぐらいしかなかった。それだけにこの「いじめと共生」の講義にかける期待は大きかったのだが、たった90分間でも得たものは多かった。

全てうのみにするのではなく批判点を探そう大学の講義で教わってはいたが、この講義ではそれも実践できた。授業後のレポートに私なりの意見を書いたところ、討議の場で先生と直接そのことを話すことができ、結局私は先生の考えに賛成できなかったけれども、有意義であったと思う。興味ある分野についての講義が聴けたうえ討議の時間も用意されていて、計180分で吸収できたものはたくさんあった。

大学に戻ってから同様の授業が聴けないことが残念であり不満でもある。

2. フォーラムについて

正直なところ今回のフォーラムの時間は苦痛だった。



おもしろくないからだ。少人数でしていた学習会での話し合いとこのフォーラムを比較するのは強引かもしれないが、学習会ときのフリートークの方がはるかに有意義だった。それは発言者の言いたいことが私に伝わってきたからだと思う。発言の仕方の上手下手の問題ではなく、自分自身の考えを述べている否かにあると思う。

フォーラム中、1度も発言しなかった身でこんな意見を述べるのは少々気がひけるが、誰かが発言すると私は心の中で、“それであなたの言いたいことは何なの？”と聞き返していた。発言者はいろいろと言っているのだが、どうも話の中心、最も彼／彼女が主張したいところが分からない。“だからどうなのだろう……？”と思うことが多かった。

あれだけの人数を前に、私は発言する勇気もなかったが、自分の主張を人に伝えることの難しさを知った。互いの意見がかみ合い議論が発展するためには相手の意見が分からなければ始まらない。議論に関する常識のようなものを確認して終わってしまった気がする。

3. 登山について

登山の前日まで、私はひたすら登山が中止になることを願っていた。日焼けしたくなかったのである。ところが登山の日の朝、ロビーで鹿大の友人と話していると、鹿大の先生が「登山は中止だな」とおっしゃるのを聞いた途端、無性に登りたくなってしまった。外が曇っていて日焼けしにくそうな天気だったこともあるが、この気持ちの変わり様には自分でも驚いたしお

かしかつた。その後、希望者は登山をすることになり、いよいよはりきる。全く、それまでの登山を嫌がっていた私はどこへ行ったのだろうか……（その日の天気が快晴だったりしたら、おそらくまだそこにいただろう……）

登山はなかなかすごいものだった。多分二度と同様の登山を経験することはないと思われる。下山途中のコンディションの悪かったこと。軍手は洗濯する気もうせるほど汚く、ゴミ箱に葬られることとなった。すばらしい景色！が広がっているはずの所は一面白の世界。まるで雲の上にも来たかのような眺めで、これはこれできれいだった。普通の登山ではなかなか味わえないだろう。しかし、距離が短く、本来なら簡単に登ることができそうなコースだったこともあるのだろうか、途中でもうやめたいとは思わなかった。さすがに最後はおなかがすいて力が出なかったが、登山に参加したことを後悔することは1度もなかった。（余計なことを考えるとすべりそうで考える余裕がなかったともいえる）。

登山をした者同士だからこそ、宿舎に戻ったときに互いの口から「おつかれさま」の言葉が出たのだろう。着ている洋服とは正反対にもものすごくすがすがしい気分になれた。福岡に帰ってからの洗濯の大変さを差し引いても、やはり登山をしてよかったと思う。

4. 出会った仲間について

もしも、この合宿に参加していなければ一言も話すことなどなかっただろうと思うような人に何人出会うことができただろうか。よくよく考えてみれば不思議なことだ。合宿前、私は誰かと仲良くなれても、互いの友達の話や学校の話、恋の話で盛り上がる程度だろうと思っていた。けれども私の予想は良い意味で裏切られた。

私はボランティアサークルに所属しているのだが、同じような障害児相手のボランティアをしている人か



らいろいろな話を聴き、影響を受けた。活動に対する姿勢から違っており、自分の活動のレベルの低さに恥ずかしさを覚えた。その人の真似をする必要はないと思うしそのつもりもないが、学ぶべきことは多いと思った。大人の意見ではなく、同年令の同じ高さから違った角度でものを見た意見を聴くことができた。これからは連絡をとり合い意見を交換したり相談にのってもらいたいと思う。

多くの人といろいろな話をした。女の子同士、しかも他大学生同士だからこそできると思えるようなこともたくさん語った。そのように話をしていくなかで、自分の気持ちに気付いてみたり、人の考え方を知ることができたりした。そして思った。こういう時間ってほんとにいいなあ……と。世の中にはいろいろな人がいるけれど、この合宿で出会った人たちとは大学では出会えない。貴重な出会いをし、貴重な時間を共にした。ノートに書いてもらったアドレスで、“これから先もこの合宿の続きをしたい”，こんな風に思える仲間に会えたことを嬉しく思う。

喜怒哀楽をごちゃまぜにして合宿は終了した。この4泊5日で私が変わったかということはないと思う。そう簡単には変わったってすぐに逆戻りしてしまうのがオチだろう。けれども日々少しずつ成長を続けているなかで（多分成長しているはず）、肥やしになったなという自信はある。“いつか何かの拍子にこの経験を生かすことがある”，絶対そう思う。

第22回九州地区国立大学間合宿共同授業の概要

第22回合宿共同授業は7月11日から15日の5日間、“共生の時代の科学・学問—いま大学で何を学ぶか—”をメインテーマに、九州地区国立大学九重共同研修所および九州大学山の家で行われました。

講義 4回（延べ12テーマ）

講義についての討議 2回

特別講義（野外） 1回（4テーマ）

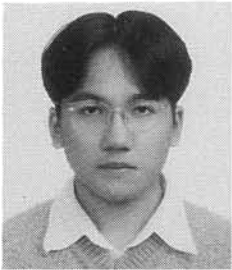
学生フォーラム “それぞれの学びと生き方

—学生時代をどうすごすか—”

交歓会 登山 懇親会 全体討議

参加者は九州地区国立12大学から学生94名、教職員42名でした。九州大学からは学生12名、教職員8名が、参加しました。また、事前に学習会を9回行いました。

来年は時期を5日ほど遅らせて、同じ九重研修所と九大山の家で開催されます。（編集委）



田 島 寮 祭

歯学部2年 中 富 満 城

<はじめに>

今やどんたく・山笠・放生会と肩を並べるまでになった(?) 伝統の田島寮祭も、早や41回を数えるに至りました。寮祭は4月下旬の実行委員会(2年生有志で構成)発足に始まり、1年生を主体に6月いっぱいかけて行われ、後夜祭で幕を閉じます。紙幅に限りがあることから、ここではメインである樽神輿について書きたいと思います。

<丸太を新調>

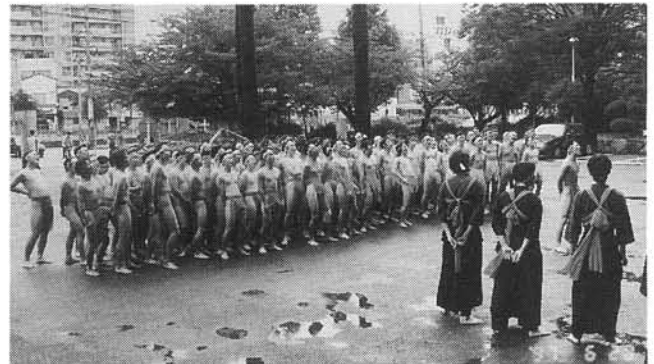
昨年の樽神輿で丸太が1本破壊されたことから、今年から3基分12本の丸太が全て新調されました。ちなみに古いのは新歓期にファイアーストームの薪となり、最後まで田島寮の役に立ってくれました。さて新調された丸太は旧タイプと比較して約2倍の重さ(当社比)。果たして1年生がこの重みに耐えきれるか、実行委員一同気を揉みながらの寮祭突入でした。

<恨めしや台風>

前夜祭までの各競技の得点合計の結果、1位がB棟(赤禪)、2位がC棟(青禪)、3位がA棟(黄禪)となりました。なぜ1位が赤禪なのかというと、勢い水を浴びても透けないのです。では黄禪は?…ノーコメントにしておきましょう。さて今年の樽神輿は僕らの予想もしなかった困難に直面しました。そう、台風直撃です。予定通り実行できるか危ぶまれました。

<樽神輿当日>

当日の朝を迎えても雨はやまず、実行委員会も決断しかねました。その時年配の女性とおぼしき声で電話



が掛かって来、「今日は神輿はすると?」と尋ねてきたので、僕は咄嗟に「やります」と答えました。こうして地元の方も楽しみにして下さっていると思うと力が湧いてきました。結局「今まで頑張ってきた1年生の為にも決行しよう」との結論に達しました。

<さあ出発だ>

須崎公園に到着してまもなく、僕らの日頃の行いの賜物か(?) 奇跡的に雨もあがり、いざ出発!…となりましたが、ここでもハプニングが。出発直前の実行委員長による巻頭言朗詠の際、何とド忘れして後半部分が出てこないという未曾有の事態となりました。「頭の中が真っ白になった」(本人談)。1年生は啞然、実行委員は苦笑という中でやり直すこと数度に及び、ようやく言い終えました。緊張感の狭間の微笑ましい一コマでした。

<台上がりをして>

実行委員は神輿に上がることができます。というか上がりたいから実行委員になるといっても過言ではないでしょう。僕も台上がりを務めました。日頃は体験できない高さ(信号機ほど!)から福岡の街を眺めたとき、「今まさに田島寮の歴史の中に生きている」という実感がしみじみと湧いてきました。1年生には来年是非この気分を味わって貰いたいと思います。

<おわりに>

後夜祭でしたたかに酔いながら、来年の田島寮祭が成功裏に終わることを祈る自分に気づき、すっかり田島人となった姿に苦笑せざるを得ませんでした。

(第41回田島寮祭事務局長)



アーチェリーをもっと 知ってもらうために

理学部3年生 ^{うおざき よし のり} 宇於崎 善 規

知らない人に聞くと、「アーチェリーってアレでしょ、あの剣みたいなので人を突くヤツでしょ?」。そりゃフェンシングでしょ。よく新入生勧誘の時に出る簡単なお笑い話です。フェンシングをしている人に悪いのですがあまり知られていないのです。一応オリンピックの競技種目になっているにもかかわらず、扱いはNHKの衛星放送の、1, 2回程(おかげでアトランタ五輪でのアーチェリーは見るができなかったのです)。とまあ扱いが小さいのです。また、弓道と一緒にされてしまいます。やはり日本では弓道の方が“弓”に関しては主流のようですね。

そんな、こんなで九州大学のアーチェリー部は成り立っているわけですが、やはりマイナーさが表に立って人数も少なくなりつつあります。いつもの練習は箱崎の文系地区の国道3号線沿いで行います。おかげで通り過ぎりや、小学校の子供達がたまにギャラリーとなっていかにもの珍らしそうに自分達を眺めていきます。また、たまには逆に国道3号線の方から驚かされることもあります。白パイがわざわざ私達の目前でスピード違反等を取り締まったり、大きい声で歌いながら、自転車でかけ抜ける人がいたり、一度だけですが、事故の現場にいわせたりと、話題はつきません。特に練習している時(射っている時です)に、白パイのケタタマシイ、ピューという音にはびっくりさせられます。部員には、かなりドキドキしている人もいます(何故でしょうか?)。

さて、アーチェリーそのものについても触れなけれ



部全体写真(合宿先にて)

ばなりません。リム、サイト、プランジャー、レスト、ポイント、ノック、フェザー、など、はっきり言って初めての人達にとって意味不明な言葉ばかりです。さすがに欧米の方から伝わってきただけに、こういった専門用語になってしまいます。弓道と違い、サイト(照準器)を持ったものですので精巧さは比較にならないほどです。また、それぞれ体格、力、レベルに応じて、異なるそれぞれの弓を引く事ができるのが最大のポイントです。あるアーチェリー関係の雑誌で書いてあった事があります「アーチェリーはオリンピック選手と同じ装備を手にする事ができる」と(でもこれは逆に言うと、オリンピック選手と同じだけの費用がかかるともみてとれるのです)。つまり最大の利点にして、最悪の“お金”に苦しめられるのです(しかし、他の部でもアーチェリーと同じ位のお金がかかることがあります)。

暗い話題はここ迄にして、競技についてですが、基本的には、ショートハーフと呼ばれる、50m、30mそれぞれ36射的の真ん中にあたる10点を狙って射ちます。実感としてわからないでしょうから、身近なもので言うと、8cmのシングルCDが10点、アルバムなどの12cmCDが9点にあたります。世界のトップクラスの選手になるとだいたいこの12cm的の中での勝負になります。またオリンピック種目になると、90m、70mもまじったシングルラウンドになります(90m、70mの的は、10点がおよそ12cmのCDの大きさです)。ちなみに九州でもこの大会は行われますが、自分達の射場では50mまでしか射てません。何とかして欲しいものです。話は戻って、このシングルラウンドも36射ずつで、結局の所144本をこのラウンドで射つこととなります。つまり満点は1440点。世界記録では、1300点代で、平均すると、9点以上を射つ事が必要不可欠になります。ここまでいうと、少しはアーチェリーの精巧さ、すごさがわかって頂けると信じております。もしわからなかったり、興味をもったなら、六本松の部室のドアをたたか、箱崎の3号線沿いを歩いて下さい。きっと気さくな仲間が迎えてくれるはずです。



Go Blue! ～アメリカ留学体験記～

経済学部4年 福島 礼子

1996年8月26日正午、私はノースウェスト85便デトロイト行きの機内で、これから始まる米国での留学生活に大きな期待と不安を抱いていました。

13時間のフライトの後、デトロイトに到着したのは8月26日の正午過ぎ。日付変更線を越えた自分を時だけが認識していました。



冬景色のミシガン

九州大学から米国ミシガン大学への第一期交換留学生として私が選ばれたのは就職活動を開始した3月でした。当時3年生の私は、自分が何をしたいのか、どんな仕事をしていきたいのかははっきりと見えていなかったもので、このまま就職活動を続けるより、1年休学してもこの留学のチャンスを利用して自分自身を見つめる時間を持つと思ったのです。

そんな訳で決めた留学でしたが、ミシガンはかなり北のほうにあるため、南国九州育ちの私としては、寒い寒い所というイメージしかありませんでした。

しかし、8月のミシガンは意外にも九州の夏よりも暑かったのです。秋にはメイプルの紅葉が今も忘れられないほど眩しく美しく、冬には真っ白な雪が静かにミシガンを包み込みます。

さて、予想外の暑さに戸惑いながらも、私は早速入寮の手続きを済まして、留学の第一目的であるべき勉学に勤しむため、授業登録に取りかかりました。米国の大学では学生一人一人にアドバイザーがつくのが普通です。授業登録や奨学金など様々な悩みに相談に乗ってくれました。また留学生に対するケアも充実しているのも、私の無茶苦茶な英語でも、なんとかやって

いきました。

米国の大学では、かなり勉強させられると言われますが、その理由はテストやレポートの回数にあります。通常、3～4ヶ月の学期内に2回の中間テストと1回の期末テスト、さらにレポートも課されます。頻繁に確認テストのようなものもあります。私は自分の中学高校時代を思い出すようでした。

また、人種のるつぼであり多くの留学生を受け入れる米国で、たくさんアジア系学生と友達になりました。経済統計数値でみる日本は先進国かもしれませんが、彼らの視野の広さや英語の堪能さからみれば、明らかに日本は今だなお発展途上国であると感じました。

そういった様々な出会いの中で、1年間の留学生活は風のように通り抜けていきました。ただ一つ言えることは、留学で自分の中の何か見えない殻を破ることができたということです。目的意識もなく就職活動していた1年前とは確実に違う自分が今ここにいることをとてもうれしく思っています。同時に同じものを見ても、一人一人それぞれ感じることは微妙に違うように“留学”をどう受けとめるかもその人次第です。

今回の私の留学体験記が、留学を志している皆さんの励みになればと思います。



パーティーもはかじユアルでもフォーティマルなのがアメリカカ

最後に、タイトル「Go Blue!」について一言。これは、ミシガン大学のキャッチフレーズのようなものです。具体的な意味ははっきりしていませんが、私の留学の思い出すべてがこの言葉に詰まっているので選びました。

海外留学説明会（第2回）の開催について

次のとおり九州大学の平成10年度派遣留学について、第2回目の説明会を開催しますので、留学を希望される方は参加してください。

1 説明会

(1) 日時・場所

平成9年10月3日(金) 午後4時～

文科系102講義室

平成9年10月9日(木) 午後4時～

六本松本館31番教室

(2) 内容

- ・派遣留学の申請手続についての説明
- ・選考及び面接の実施についての説明

2 九州大学の派遣留学

(1) 派遣先大学

クイーンズランド大学 ミュンヘン大学

梨花女子大学校 延世大学校 西江大学校

ワシントン大学 ミシガン大学 ライス大学

その他

(2) 留学期間

1年以内（6ヶ月でも可能

ただし、単位が取得できる期間）

(3) 応募資格

九州大学に在学中の学生

(4) 語学力

学部学生で英語圏の大学の場合は、TOEFL550点以上が必要です。

(5) 特典

- ・学生交流協定に基づく派遣留学生は、留学先の授業料等が免除になります。
- ・派遣先大学で取得した単位は、単位互換される予定です。
- ・奨学援助金支給の可能性がります。

3 担当

九州大学学務部留学生課

電話 642-2141

留学生センター1階（東区箱崎6-10-1）



平成9年度に交換留学生として留学する学生の激励会が、8月11日に総長室で行われました。写真は、杉岡総長から激励を受ける交換留学生。

自転車通学者に一言

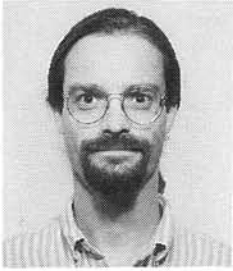
地下鉄3号線の工事が皆さんの夏休み中に本格化し、六本松キャンパス周辺の歩道が随分狭くなり、自転車が通りにくい所があります。

先日六本松バス停付近で、女子学生の自転車が市民に触れました。女子学生はそのことに気付かず通り過ぎたため、その方は大変怒って大学に抗議にこられました。

狭い歩道では、自転車を押して通るくらいの心遣いが欲しいですね。

(編集委)

＜新任教官自己紹介＞



An Introduction

Bradley Sinclair

I have recently arrived in Japan from Canada, to take up the position of Assistant Professor (Joshu) in the Biosystematics Laboratory. I arrived here from the subarctic region of northern Quebec, where I was living for the past year with my family in the Inuit village, Tasiujaq. Before this, I completed a two-year postdoctoral fellowship at the Australian Museum, in Sydney Australia. I returned to Canada to accept a short-term contract as curator of the University of Guelph Insect Collection.

I received both my undergraduate degree and Master's degree at the University of Guelph, and a PhD at Carleton University in Ottawa. My field of research is the Biosystematics of flies (Diptera), particularly the dance-flies (Empidoidea) and seepage-flies (Thaumaleidae). My program is committed to collection-based research and includes taxonomic revisions, involving detailed descriptions of morphology, evolutionary history and biogeographic patterns. Dance-flies are associated with cool, running water habitats, primarily confined to mountainous or hilly regions.

During my time in Japan, I hope to learn much about the dance-flies of east Asia, particularly Japan. Field collections are planned to supplement the impressive collections here at Ropponmatsu campus. Studies will compare the relationships of dance-flies between east Asia and North America. I hope to inspire the hard working graduate students to seek answers to questions such as, what are the origins of the Japanese fauna, and where are their closest relatives.

I have enjoyed my stay so far in Fukuoka. My young daughter has been quite taken with everyone, especially the children in our apartment block.

(比較社会文化研究科)



自己紹介

よしもり あきら
吉 森 明

1997年6月から理学部（六本松地区）物理学科に助教として着任しました。それまでは、名古屋大学に助手として勤務して、化学物理という化学とも物理ともつかない境界領域の研究をしていました。福岡は、私にとって初めての土地なので、戸惑うこともありますが、いろいろな人や物に出会い、いろいろな経験をしたいと思っています。

生まれたのは、名古屋ですが、名古屋には3年ほどしかなくて、直ぐに東京に移りました。東京には10年ほどいて、千葉に移りましたが、1年で大阪に行きました。大阪で中学と高校を出て、大学は名古屋大学に入学しました。名古屋で学位を頂き、北海道の釧路に就職し、そこを2年半で止めて、また元の名古屋大学に戻りました。

この様にあちこち転々としていますが、結局、名古屋が一番長いです。また、留学中のカナダも入れて実は、太平洋から離れたのは福岡が初めてになります。

化学物理については、聞きなれない方もいらっしゃると思いますが、化学反応などの化学現象を使って物理の諸問題を考えようというものです。私自身は特に溶液の動的性質に興味がありますが、化学、物理を問わず面白い話があったら教えて頂けると幸いです。また、理論的な研究をしているので、数理モデル一般に興味があります。数理モデルを使って研究されている方なら、分野を問わずお話出来たらなあと思っています。

その他、福岡や九州の観光の穴場や、お祭りなど、面白いことがあったら気軽に声をかけて下さい。特にお祭りには興味があります。それから、おいしい食べ物や、おいしい食べ物を食べさせてくれる店も大好きです。ただしお酒は飲めませんので、ご容赦下さい。

今後ともよろしくお願ひします。 (理学部)



メヒコへの旅

1991年 法学部入学 なか みね たか こ 中 峰 貴 子



どこにでも住めるメキシコ人にとっては湖も生活の場だ



メキシコには自然の色がたくさんある



パンアメリカン・ハイウェイ沿い

飛行機の窓に鼻をぴったりくっつけて、その美しさにどきどきしていた。情熱の国メキシコの大自然に迎えられ私の旅が始まった。



メキシコの静かな夕日

軽く自己紹介をします。旅が大好きです。具体的には自分のいる空間とは違った空間に移動するのが好きです。その目的は、「知る」ことです。世界は自分の知らないことだらけです。体で経験したことは自信を持って「知っている」と言えます。旅はその「知る」の一つの手段ですが、自分の人格が分かるだけではなく、潜んでいるほかの人格も引っ張り出され再発見となり、自分の形成に役立つものだと思います。

学生のころは、北海道から福岡までバイトをしながらの旅、タイ・シンガポールのゼミ旅行で初めて外国を知り、そのままドイツ、スイス、イタリア、中米。自分の居場所を変えるだけでこれだけのおもしろ新発見があるのか、といつも感動とともに帰って来ました。そして今回、ラテンの熱き情熱を求めてメキシコへ旅に出ました。
(表紙写真参照)



韓 国 の 伝 統 美

しん ひよ な
申 鉉 夏

韓国語の「仄」(モツ)は、「(身なり・行動・人となりなどが)興味をそそる洗練された状態や美しさ」、「風采・容貌・風致・事物の真の味」をさすことばであります。およそ姿・形のあるものには備わっているこの「仄」も、時代や思潮の変遷につれ、その様相や概念が変わるようであります。しかし、それらとはなんら関係なく、いつの世にも変わらないばかりか、時間が経てばたつほどかえって光輝と薫りを放つ「仄」があります。それがほかでもない、民族固有の伝統美であるといえましょう。

韓国人の性品と姿、韓民族の身につけている伝統美は、韓国の独特な自然と山河の性情から育み培われたものであります。なだらかで素直な山並みが平野を取り囲み、清らかな清水がゆるやかに流れて大地を潤す蒼空の国韓国。長い歴史を経る間、韓民族の心に積もりつもった憂いと懇願、それに満ち足りた喜びと笑いが入り交じったように思える、山河の姿と自然の声の中に、われわれは韓国の造形美のあらゆる映像を見ることができます。

もし誰かから、韓国美術のうちなにが代表的なものかと聞かれたら、われわれはためらわずに工芸品を挙げるすることができます。それは気品きんちがあり、善良で、おおまかでありながら、それでいて廉恥をたつとんだ民族の心と自然の意思が、ともに育み培ったからであります。その代表的なものは、長く細く、ときには傲慢ごうまんで、ときには悲しみをたたえている、高麗青磁えんの娟えんたる曲線美であります。そして気品があり、着実で、稚気でありながらも健康そのものの李朝磁器であります。ここではこれらを中心に、韓国の伝統美のうち、色彩の美と曲線の美について垣間ひいろ見ることになります。

高麗青磁の美しさは、青磁ひいろ翡色の美しさにあります。雨が上がり、霧が晴れると、遠い山の尾根越しに澄んだ空がくっきりと浮かびます。その時の微妙ともいえる空の美しさは、よく青磁の色にたとえられ、「雨後晴天色」ということばが生まれました。無心に高麗青磁の青い色に見入っていると、ほんとうに雨が上がった後の高い空を眺めているように、心が落ち着くのを

覚えます。それは威張ることも、あざけることも知らない、そしてときには微笑み、ときにはささやくような、さらにはときには深い思いに耽ひろっているような孤独な青い色なのであります。高麗人はおそらく、まるで彼ら自身の長い間の憂いと念願、哀歎を、ひとまとめにして漉したような青い色に魅せられ、<翡色>と名づけたのに違いありません。

青磁は10世紀ごろ、中国の杭州湾の窯から渡ってきました。どちらかといえば泥臭い越州秘色は、清く澄んだ高麗の空の下で、青磁ひいろ翡色の独特な美しさに衣替えしました。この淡泊で澄んだ青磁の青い色の美しさは、高麗人の呼吸だったのであり、韓民族の永遠にさめない夢となったのであります。そして過去の長い歴史を通し、われわれの生き方の基本をなしていました。したがって高麗青磁の青い色には、至純な韓民族の息吹が息づいているのであります。

高麗青磁の美しさは、あのすばらしい曲線の美にもあります。始まりも終わりもないような細長い線、もろいようで柔軟な曲線。清楚せんで娟えんとした高麗青磁の姿態の美しさは、ほとんどこの曲線の力によるものであります。そのうちでも真っ先に指折られるのは「梅瓶」であります。豊かな肩に小さな口を上品にすぼめた青磁の梅瓶を眺めていると、いらだっていた気も春の雪が解けるように安らぎます。なめらかな腰に気品のある糸底、すぼめた小さな口の中には、ちょうど高麗人の長い念願がいっぱいこもっているように感じられます。悠長で風雅だった高麗上流社会の生態が、



高麗時代の象嵌青磁

がる曲線の美は、韓国の景勝すぐれた山河が描き出す、なだらかな曲線の美から育まれた美感であります。

空に向かって反り返るような、韓国の瓦家の軒先の曲線の美は、われわれ人間の天空に向ける憧憬の姿勢であります。それに合わせ軒を支えてそそり立つ太い柱も、天をめざす心の現われであります。天と地を結ぶこの曲線と直線は大地の空



ソラクサンレンヌンサ
雪嶽山神興寺の軒先の構造

間を占めているけれども、その志向するところは天にあります。「天・地・人」の三つを「三才」とも称していますが、天と地の二つの水平線の間で、直立の姿勢で行動するのは人間だけであり、その人間の起居するところが韓国人の場合は瓦屋であります。

このような曲線の美、すなわち反り返る軒先のような曲線の美は、韓国の女性の「チョゴリ（上衣）」にも見られます。それはチョゴリの底、すなわち肘の部分であります。腋の下から袖口までの底の部分を通常「ベレギ」と呼んでいます。[チマ（婦人用の裳）・チョゴリ]姿の女の人が、手を上げて髪の手入れをするとき、そのベレギはまるで、韓国瓦家の軒先を連想させる美しく反り返る曲線の美を描き出します。

女人のチョゴリはベレギだけでなく、肩から、または襟などから、バラエティーに富んだ曲線がメロディーのように流れています。チョゴリには曲線の美だけがあるわけではありません。衿の鋭さを見せる直線、つけ紐の長く垂れ下がる直線は、ベレギの曲線の美と相俟って言葉では言い表せない調和を醸し出しており、それこそ線の饗宴とも言えるのであります。



チマ・チョゴリで正装した女人たち

韓国人の尚美する雅趣は、宇宙の原理をありのままに現わした「三才」の調和美であります。韓国人男女の服装も、この調和美と釣り合うものであります。その中でも女人のチマ・チョゴリが、宇宙の調和美を一段と生き生きとしたものに表現しています。チョゴリは軒先であり、チマは柱の役割を務めるものだからであります。短いチョゴリに長いチマ、曲線と直線が形作る調和美、あまりにも長すぎるように見えるつけ紐と、これをあまりにも短すぎるようなチョゴリが、えも言われぬコントラストをなして雅趣を添えます。

今日の女人のチョゴリの型は、李氏朝鮮中葉以後に発達したものと見られますが、三国時代にも上はチョゴリ、下はチマが通常の基本服装だったようでありませぬ。高句麗古墳壁画に描かれた女人の服装を見ると、上衣が腰の下まで下がり、今日の半コートを思わせるように帯を結んでいます。このような上着の下に、踵まで来る長く垂れるチマを着ているのは、古代服装においても韓国人は線の巧みな調和に意を用いていたことを物語っていると云えましょう。

韓国と日本を問わず、今の若い世代はしだいに伝統美をおろそかにし、また失いつつあるようであります。その理由は何んといつても、情緒の枯渇が最大の原因ではないでしょうか。心の余裕をもって伝統美から情緒を感じ、人間の貴重な資産である情緒をとりもどすべきであります。

来る21世紀は統合の世紀と言われています。これまでとかく無心に見過ごされてきた隣り合う韓民族の、魂と情緒が脈みゃくと流れている伝統美、民衆の生活の中に芽生え培われた風雅と美を知るのは、日本の若者にとってあながち無意味なことではないでしょう。

申敏夏氏略歴

- 1928年 韓国慶尚北道安東に生まれる
- 1957年 高麗大学校文科大学卒業
- 1968年 京都韓国学校勤務（韓国文教部派遣）
福岡・長崎韓国教育院院長（同上）
- 1974年 九州大学研究生，大学院生，研究員
教養部非常勤講師
- 1984年 韓国慶尚大学校師範大学教授
- 1993年 同上退官 現在福岡市南区に在住
- 著書 『アジアの文化と教育』（共著）
『日本文学史』（学文社，韓国語）
『恨の海峡』（石風社）など多数



郭沫若と湯の原温泉

— 佐賀県富士町熊ノ湯温泉文学探訪 —

比較社会文化研究科博士2年 ^{ウー}武 ^{デー}継 ^{ピン}平

中国現代二大文豪の一人郭沫若が嘗て日本に10年間留学していたことはよく知られている。その10年間の間、彼は日本人妻佐藤をとみと子供三人と一緒に佐賀北山にある小さくて静かな熊ノ湯温泉村で一ヶ月余り滞在していた。そこで郭沫若は傷だらけの心を癒やしながら、数少なくない重要な文学作品を書き上げたのである。当時の生活の様子は作品集『橄欖』、自叙伝小説『行路難』、『紅瓜』に書かれているほか、地元『佐賀新聞』(昭和42.11.26)にある熊ノ湯温泉の紹介や、中国文学者目加田誠先生の書かれた文学探訪記にも断片的に言及されている。

「新屋」旅館、昔の風情は今いずこ？

今までの文献資料によると、大正13年の秋、郭沫若一家が熊ノ湯温泉村にある「新屋」という茅葺きの宿と村はずれにある農家の「貸間」に泊まっていた。そこが今どうなっているのだろうか。73年前のことだから、昔のまま残っているはずはまず無いと思うが、たとえ変わったとしてもどんな風になったのかを知りたい、というような好奇心に駆られて、私は今年の4月25日に福岡の曲淵から背振の三瀬峠を越えて、55年前に徒歩で行かれた目加田先生と同じ探訪ルートを取った。

熊ノ湯温泉は古湯温泉と共に佐賀駅から北方16~20キロの間の、標高200メートルの山峡に位置する。また熊ノ湯温泉は昔から「湯の原」とも呼ばれ、泉歴も古い。併し、同じ佐賀県内にある嬉野温泉や武雄温泉のような一年中客が後を絶たない付属施設が整った温泉街ではなかった。郭沫若夫婦がそこを選んだ大きな理由は二つある。一つは何処よりも安いこと。もう一つは交通が不便で客足がすくなく、小説を書くのに気が落ち着きそうだから。

「新屋」旅館は私の目の前にある。興奮のあまり、多少強引かもしれないが、単刀直入に旅館のご主人と女将さんに話を訊いた。初めての現地調査で今までの文献に記載されていないことを聞き出したので、その後、第二回、第三回の聞き込みを計画し、また実行し

た。

「新屋」という宿は壁が赤茶けた色で少なくとも3, 4百年は経った看板があるが郭沫若は書いたが、私の目の前にある「新屋」旅館は大正時代を思い出させることのできるようなものは何一つ残っていない(写真1)。屋根はびかびかの瓦葺きだし、看板も新しい。女将さん(田中しつこ、64才)の話では、「新屋」旅館は大正末年から今まで2回改築された。第1回は昭和6年、2回目は昭和46年だった。昭和46年に改築されるまでは母屋の左側に確かに茅葺きの離れがあった。そして大正13年の秋郭沫若一家が最初に泊まっていたのが母屋ではなく、料金格安の離れだった(其の瞬間私には郭沫若の書いた「関帝廟みたいな二間」という言葉の謎が解けた)。その頃「新屋」を経営していたのは田中與一と妻キクだった。長男新九郎は未だ結婚していない。彼はその後ツグという娘を嫁に迎え、家を継ぐ子供を残して戦死したという。いまの女将は新九郎の長男の嫁である。泊まりに来る客に中国人がいるのは珍しいので、嫁いでからまもなく聞いたという。

「新屋」の若いご主人田中康仁さんの案内で私は離れが取り壊された場所を見た。幅10メートル足らずの空き地で、昔を偲ばせるものは何もない。



昭和6年以前に撮った「新屋」旅館の正面写真と近所の人々

数日後また訪ねていった時に、昔の写真を2枚掘り出したという。写真と言っているが、昭和6年以前に撮った写真で作った「新屋」オリジナル葉書だった。正面から取った1枚は母屋しか写っていない。裏から撮ったもう1枚は川辺から取ったので屋根の低い離れは殆ど見えない。しつこさんは私のがっかりした表情を見て突然思い出したようにある重要な情報を提供してくれた。

謎の「貸間」と九十二才の証人

大正13年10月に書かれた郭沫若の「新生活日記」に依れば、「新屋」に5日泊まった後、安娜(佐藤をとみ)は費用を節約するため自炊できる近所の貧しい農家の2階にある「貸間」に移ったという。^{しか}併し、農家の名前は記されていない。全くの偶然だが、私は昭和42年11月26日の『佐賀新聞』の熊ノ湯温泉関係記事に郭沫若と関わりのある地元の農家の名前を見つけた。それは斉藤という農家の名前である。そして今年の5月私が二度目の現地調査をする時に入手した情報とは、大正13年当時斉藤農家の20才の娘さんが今92才のご高齢で尚村に健在だということである。

5月16日、私は熊ノ湯温泉街に住んでいる斉藤お婆さんを訪ねた。92才だから取材が無理でも昔のことを少しでもいいから思い出して欲しかった。お会いした時丁度庭の花か何かを弄っている彼女の姿を見た瞬間インタビューを決めた。お体を案じて30分くらいで終わったが私の質問に最後まで答えてくれた。案外耳が聞こえるから濃厚な佐賀弁が多少聞きづらい外、話しの辻褄はよく合う。斉藤お婆さんは明治37年生まれで本名は斉藤ひさ。大正13年の秋郭沫若一家が「貸間」に移ってきた時20歳前後で、父斉藤たきち、母かめと爺さん婆さんと一緒に暮らしていた。二階の「貸間」をある外国人の妻に貸したことはよく覚えている。彼

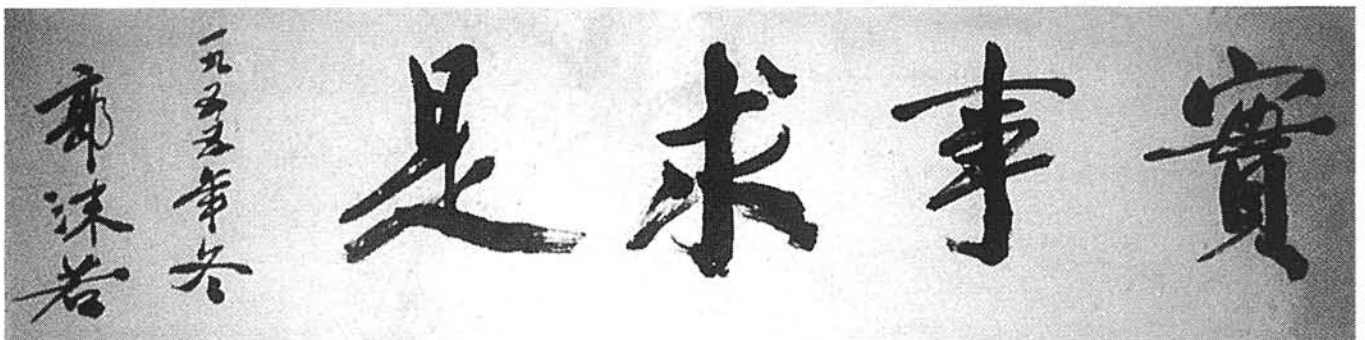


昭和6年以前に撮った「新屋」旅館の裏側

女の話では、今住んでいる所は昔の敷地ではない。昔の家はぼろぼろの二階建てで「新屋」旅館の左側から20数メートル離れた一段と低いところにあった。それが昭和24年の大雨による嘉瀬川の大増水で流されてしまったという。私が「新屋」から拝借した葉書を彼女に見せたところ、写真に写っている竹藪の茂みに昔の「貸間」があったと教えてくれた。私は後日プロの写真屋さんに葉書の処理を頼んだ。なるほど、甦った葉書には確かに竹藪の茂みがあり、そして注意して見ないとなかなか気づかないが間違いなく家が写っている。

その葉書は貴重な史料だから勿論調査終了後持ち主に返したが、私がコピーに取って置いたコンピューター映像は私の宝物となった。今から73年前に大先輩郭沫若は熊ノ湯温泉の人々から親切にしてもらったと自伝に書いているが、半世紀以上も経った今日、文学者郭沫若の足跡を探訪する後輩の私は、今一度彼らの厚い人情をつくづく感じたのである。

ちなみに、現在の熊ノ湯温泉街の案内看板には、大正13年10月に中国現代文学者郭沫若がそこで静養兼執筆活動をしていたことを記録している。また、熊ノ湯温泉が昭和24年の大水害に見舞われたことも記載されているのである。



郭沫若氏は本学医学部の卒業生です。文学者としてだけでなく、政治家、書家としても有名な同氏が、昭和30年12月中国科学院訪日学術視察团团長として来学された折りに揮毫されたものです。現在副学長室に掲げられています。



中国映画の魅力

くきかみどり

中国映画を見たことがありますか？

中国語を教えている学生に、中国の小説を読んだことがありますか、と聞くと、たいてい、困った顔をして首を振る。そこでわざと、「え、一冊もないの？」とあきれてみせると、ぱらぱらと『藤野先生』とか、『故郷』を読んだという答えが返ってくる。しかし、それも教科書に載っていたから読んだだけ。進んで読んだわけではないという。中には『三国志』や『西遊記』、『水滸伝』を読んだという学生がいて、感心すると、実はちゃんとした本ではなく、子供用のダイジェスト版や、漫画で読んだのだそうだ。

一つの国の文化や社会を理解するのに、小説や映画をみることは、極めて有効な手段である。というわけで、学生にも、できるだけ中国の小説や映画を見るように勧め、授業などでも時間に余裕の有る時は、中国映画をみせることにしている。

最近みせたものに『心の香り』(1992年 孫周監督)がある。これは、外祖父と孫との心の交流を描いたもので、その年の中国のアカデミー賞ともいうべき、金鶏賞最優秀監督賞をとった秀作である。特に、外祖父を演じた朱旭(NHKのテレビドラマ『大地の子』で、主人公の養父の役を演じた)の演技がすばらしく、「五年に一つの傑作」との高い評価をうけた。後で学生に感想を聞いたところ、「どうせつまらないだろうと思ってみえていたが、とても面白くて感動した。中国映画も、なかなかやるじゃないかと思った」との答えが返ってきた。中国映画を内心みくびっていたらしい。正直いって、以前の中国映画は、政治宣伝臭が強い、面白くない、といった、人に勧めるのはどうかと思うものが多かった。しかし、最近は高いレベルの作品が続々と作られ、内容も面白さもなかなかのもの。さらに台湾、香港も視野に入れると、中国語圏の映画はかなりの活気を呈している。

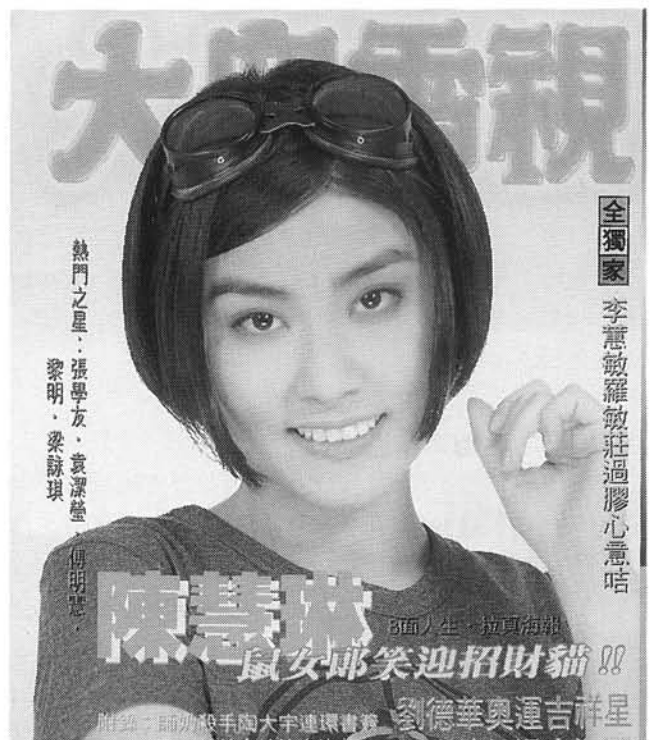
香港映画の面白さ

中でも香港映画は、一部のファンによると「世界一面白い」そうで、見応えのある映画が山積みである。

もっとも、ほとんどが広東語を使用しているため、残念ながら共通語を教えている授業では見せられない。そこで、学生には、「ビデオ屋さんで借りてみなさい、面白いから」ということにしている。店にはちゃんと、香港映画のコーナーもあるくらいで、じわじわと人気もひろまっているようだ。

「アジドル」って何？

なにしろ、「アジドル」という言葉まであるのだから。最初聞いた時は何かと思ったが、「アジアン・アイドル」の略で、香港の人気スター、レスリー・チャン(張国榮)、ジャッキー・チェン(成龍)、アンディ・ラウ(劉德華)等のことを言うそうである。もっとも何をいまさら、という気もする。彼等の人気は何年も前からで、中国語圏はもとより、韓国からも、コンサートには、ファンがツアーを組んで出かけるほどであるからだ(日本のファンは、情報が遅れぎみで可哀そう、との声もあるらしい)。



香港の「ニューズウィーク」の表紙を飾るケリー・チャン



香港の映画雑誌「銀色世界」 — ジャッキー・チェンは今でも大人気 —

特に、レスリーの人気はたいへんなもので、最近では日本でもコンサートを開いており、彼の映画をみにゆくと、隣の席から、「この間のコンサート、よかったわね」という、彼の「おっかけ」達の話し声が聞こえてきたりするほどである。

映画で夢がみられるか？

実は、そんな彼らが本当に活躍したのは八十年代。今の香港映画は黄金期を過ぎ、かげりがみえてきたという。映画そのものの魅力がうすれたからともいうが、その原因の一つに、経済的にある程度の発展をみた後、もはや香港人が、映画で夢をみられなくなったから、という意見があった。これは日本映画の衰退とも考えあわせて感慨深いものがあった。

とはいえ、とうの昔に映画で夢をみることなど忘れてしまった日本人から見ると、香港映画は、いまなお、夢や希望を与えてくれる素朴(?)な力をそなえているようである。

おとぎ話のラブストーリー

それをつくづく感じたのが、最近見た香港映画『世界の涯てに』(1996年 李志毅監督)。主演は今や、日本の有名化粧品会社がCMに起用し、「アジアン・ビューティー」として人気のたかいケリー・チャン(陳慧琳)。相手役に金城武(カネシロタケシ 父親は日本人)という、豪華メンバーである。

ストーリーは、白血病にかかり、余命いくばくもないと知らされた娘が…と、ここまでいうと、噴き出し

て、いや、もう結構です、という人もいるかもしれない。そう、こんな古臭い正統的ラブストーリーなんて、今どき日本では少女漫画でも流行らないだろう。だが、映画はおさえた調子で、途中に色々な人間の悲劇をもちこみつつヒロインの死までをやさしく描いて行く。最後は彼女の葬式の場面だが、白い服を着た彼女が(他人には、彼女の姿は見えない)にこにこ微笑みながら、友人や父親、夫、赤ちゃん(死ぬまでに子供を産んでいた。意外と丈夫な女の子であったわけである)たちに別れを告げるシーンでは、彼女の、皆のおかげで、幸せだったわ、ありがとう、という気持ちが伝わってきて、素直に感動できた。最後に香港の景色をずっと映すのも、監督の香港への愛情がひしひしと感じられ、「借り物の土地、借り物の時間」といわれてきたが、ここはもう、我々にとって、かけがえのない故郷になったのだ、とのメッセージが受け取れた。

見終わって、つくづく、人への信頼、家族の愛情、人間の善意といったものを臆面もなく描くことは、もう日本映画には無理なのだろうか、と考えこんだ。宮崎駿監督の『もののけ姫』は、監督自身の言葉を借りれば「臆面もなく」人間と自然との共生を訴えているが、あれもアニメだから出来たのだろうか。そう思うと、少し寂しい。

それはともかく、素朴な感動や、人間の善意といったものを、中国映画は、まだ描きつづけているわけで、そのうえ面白いとすれば、かなりのおすすめ品。これからは機会があればできるだけ、中国映画を見て下さい。(比較社会文化研究科)

〈講演要旨〉

第34回文化講演会：1997年6月7日(土)

インターネット社会の到来 — ネットィズンの時代の中で —

講師：ハイパーネットワーク社会研究所理事 ^お尾 ^の野 ^{とおる}徹 氏

講師のプロフィール

1949年	大分市に生まれる。
1971年	九州大学工学部電気工学科卒業
1971年	日立製作所入社
1974年	鬼塚電気工事入社
1985年	ニューコアラ事務局長
1993年	鬼塚電気工事代表取締役社長
1995年	ハイパーネットワーク社会研究所理事

1. コンピューターとの出会い

学生会館のこのホールというのは、僕はダンスホールとしてしか見たことがなかったですけど、こんな使い方もあったんですね。あの当時、教養部の頃はサッカー一部にいてですね、この裏に、大変ぼろっちい寮があって、そこで、新入生歓迎コンパから、お酒をもどすほど飲むことを覚えさせられて、それから女性とダンスを踊ることを覚えさせられてと徐々に大人になっていく過程をこの近くでやったわけですけど、そのときにちょうど、モダンスカラズというジャズバンドがあって、それに私の高校の先輩が一人いまして、その人から誘われて、そのバンドに入ったんですよ。誘った人間は今プロになってしまって、アメリカでも活躍している辛島文雄っていいんですけどね。それで、いつもこのステージに立つっていうことはですね、バンドでダンスを踊ってもらうために立つということであった訳であって、なにかこう非常に妙な感じがします。

ときどき九大の方々とお話しをするときに、よく笑い話としてお話しするんですけどね、その学生時代に火を付けたのは、皆さんご存じの通り、あの、ジェット機が落ちた時だったですよ。私の大学3年のときだったと思いますけど、そのときはもう箱崎の方に移ってましてね、本学の目の前の所に住んでたんですが、夜の7時半か8時くらいだったと思いますけど、ドッカーンと、ものすごい音が響いてですね、何事やろかとぱっと窓を開けたら火柱が向こうの方でぱっと走

っておる。誰か実験に失敗したと思いますわねえ、みんなわーっと走っていくから僕も走っていったんですよ。そしたらですね、なんか人がわいわい言ってる。「何が起こったんですか。」と言ったら「いやあ飛行機が落ちたんよ。」「ええ!? 何ですか、どこに落ちたんですか?」「この建物。」「その建物なんですか?」「これねえ、計算機センターよ。」って言われたの。僕それまでまだ、計算機なんてSFの世界でしか見たことがなかった。まだ現実の世界の話ではなかったし、僕達が触れるようなものでもなかった。この九州大学でさえ、大型計算機センターというセンターを作らなければコンピューターを買うことが出来なくらい高価な物だったわけですよ。ええっ、こんなところに大型計算機センターがある。なるほどなあ。犬も歩けば棒に当たるといふけど、さすがジェット機だ、落ちるときは大型計算機センターの上に落ちるんやと、というようなことを感じました。

それからコンピューターにずーっと付きまわられてるんですね。4年生になって卒論になったらですね、卒論の対象がコンピューターですよ。で、卒業して、それで終わりかと思ったらこれだけじゃなかった。今度は就職した先が日立製作所のなかのコンピューターが専門の部署。で、それからというのは、なんやかんややってもコンピューターがついてまわる。あのジェット機がわたしのすべての人生を変えた。今だに、コンピューターにつきまわられています。

2. 大分のネットワーク コアラ

福岡から東京に出ていくときに、とっても開放感をもって東京に出ていったんですよ。なぜかっていうと、今は福岡いいですよ、大変ね、日本の中でもとっても素晴らしい地域になりつつあるけど、その当時の福岡というのは、大分から福岡に来てですね、なんで福岡に来たんだろうか、なぜ東京に出なかったんだろうかと思いましたよ。なにやっても東京が主人公で、福岡なんて主人公じゃなかったもん。二番煎じか三番煎じで話を聞かされると。で、いいジャズバンドも東京でしかないとかね、映画だってそうでもない、と。レコードだってそう簡単に手に入らないとかね、いろんなことから福岡に来たことが間違ってたんじゃないかと思う。だから、東京に出ることは大歓迎だといったことで、日立製作所の方に出ていったわけですけども、向こうで生活し始めてびっくり仰天、学生時代に持ってた荷物を段ボールに包んで向こうに持っていったわけですよ、3年半ほど向こうにいたんですけど、とうとう、一回もその段ボールを解く暇がなかった。なぜかって言ったら解いて置くスペースがない。だからもう、ゼーンぶ積みっぱなしで持ってってまた持って帰ってみたいなものですけどね。こんな生活本当に東京の人達楽しんでるんだろうか、通勤で片道1時間っていうのも納得いかなかったし、どうもこれが人間のすることなんだろうかと、福岡、大分の生活に戻ったときに思ってしまう。っていうことでね、どうせやるなら自由で自然豊かで、自由奔放に、そういった生き方の中で物事を考えていってもいいんじゃないかという気持ちになって大分に帰ってきたわけです。福岡に行って失望して、東京に行って失望して、だけど今度大分に帰ってもっと失望した。なぜかっていったらですね、ものすごい田舎に帰ったっていうような形で、都落ちしたという感じだったんですよ。

自分でもがっかりして、常のがっかりし続ける人生面白くないなあと思ってたら、たまたま平松守彦さん、大分県知事だったのね、この人、地方の時代とかいろいろ言ってますけど、まあこの人ネアカな人でね、僕たちがいない限り尽くして何か嘆いていても、ネアカに物事を考えていくというタイプなんですよね。一村一品運動っていうのがありますけど、あれは正に、逆転の発想だったわけですよ。大分っていうのは小藩分立の地域で、徳川幕府から沢山の地域に分割されてしまった。なにしろ、徳川幕府に歯向かった地域だからね。

だから、分割されてしまって、その地域内でお互いに喧嘩するように仕向けられたわけですね。それを逆手に取って、でもそれだけ小藩分立があるんだから、それぞれの地域が一ついい物を作って、それも世界に通用するものを作っていいんじゃないかと、で、それを作りあう、育てあう中で人が育っていき、ほんとにいい製品が出来上がっていくわけだから、そういった形で物事を考えてみたらどうかというのが彼の考え方だったわけですね。で、僕も考えてくるわけですが、一村一品運動っていうのは地域起こしの運動ですから、どちらかという農村部の運動。だけど大分市内に住む、まあ大分の中でも都会部に住む人達にも何かやれることがあるんじゃないかと思ったときにちょうどコンピューターネットワークの話があったわけです。中小企業庁からね、中小企業用のデータベースを大分に作りましょうという話があった。それで、コンピューターのデータベースを使いこなすことであれば、僕達はそれなりに僕の過去の背景も生かして、地域のために何か出来るのではなからうかと思ったのが、まあそもその発端であるわけですね。友達同士、青年会の連中30名くらいで集まって、1985年の5月、今から12年くらい前に、集まって、スタートをしたのが実はこのコアラなんですね。



だから当初、データベースを中小企業のために使いこなすっていうところから始めたんですよ。30名の人達で集まって何をしていたら、自分のところの会社の企業紹介。我が社はっていうのを一生懸命持ち寄って来てデータベースに入れる。で、それをみんなが見あう、っていう形なんだけどね。全然面白くないですね。大分県三重町役場っていう、役場がありますけどね、そこに、広報紙の担当者がいた。たまたま私達のグループに入ってきて、じゃあうちの広報紙を載せてあげる、と。あ、それなら面白いかもしれない

とおもった、じゃ、載せて載せてと言って、載せられたのを見たらですね、三重町町議会議事録、こんなの全然面白くない、もっと駄目ですよ。これもまたがっくりくるのね、なんかもっと面白いものないの、と言ったらですね、本人も一生懸命考えて、次に上がってきたのがですね、ごみの収集日一覧とかね、休日のガソリンスタンド、オープンしてるとこ一覧とか、三重町までわざわざ入れ行かんよ、とかいう話になるんだけど。そんなことしかなかった。

ほんともう突き当たって、もうどうしようもないかなというときに、たまたま、熊本の八代で、情報化展があった。九州で、そういったコンピューターネットワークをやっていたところがまだ非常に少なかった。しかも、市民レベルで使うような方向で行ってたのは僕達だけだったものだから、それをデモンストレーションしたい、というようなことをアスキーという会社が出てきて、あぁいいですよっていうようなことになって、熊本の八代でそのデモンストレーション、コアラをやったことがあるんですよ。そしたらですね、そこに来た農村のおばあさんおばちゃんがですね、面白がって見るんですよ。何見てるのかなと思ったら、その三重町役場の広報紙のデータを見てる。で、何かといったらですね、そこに書いてあったのは、三重町に住んでる、小学校5年生だったとおもいますけどね、女の子の作文だったんですよ、どんなことを書いていたかと言いますとね、私の住む三重町はとってもきれいなところなんです。緑がいっぱいで、夕焼けがとってもきれいで、川がきれいで、とっても素敵なおとこなんです。私はこの三重町にずーっと住んでいたいと思うんですといった、個人の感想を書いていたんですよ。みんなそれを面白い面白いといって読む、なるほどなあと。それまではね、コンピューターを使って見るというのは事実情報、客観的に書かれた、我が社はとかね、一村一品運動というのは昭和何年に平松守彦が始めとかそういった解説風なのばっかしを見ていたのが、あるときに突然、個人の考えとして、私はこう思うの、こういう風に感じるのといった、主体的なものが入ってきちゃった。それの方が圧倒的に面白かったわけですよ。読み直しても面白かった。ということでね、あぁそうか、コンピューターネットワークというのはただ単純にデータベース的に使うよりも、コミュニケーションのために、自分の気持を表して、お互い同志の気持をやりとりするコミュニケーションのために使った方がいいのではないだろうかと思った、これが一番

重要なことだったんですね。これがコアラの一番重要なポリシーというか、その当時から変わらないことなんです。



3. インターネット事始め

それからインターネットを使いたいってことで一生懸命やってたんですが、なかなかうまくいかなかったときに、富士通が、日本でインターネットサービスを始める。1994年の7月に全国六大都市で始めるって聞いたんで、富士通に飛んで行ってですね、富士通さんちょっと目がおかしい。日本は六大都市じゃない、七大都市だよ、と。で、大分を強引に入れ込んでですね、で、大分を、インターネットが出来るようにしてしまっただけなんです。

だから、はっと気がついたら、六大都市があっても、地方ではね、東京以外では大分が一番最初にインターネットサービスを始めちゃったわけですよ。で、繋いでみて分かったわけですけど、自分のところのホームページ持ってる場所ってなかなかなかったんですよ。九大はあったと思いますねえ。あったけど、面白くない、あ、言っちゃ怒られるかもしれないけど。ホームページがちょこっとあるくらいのもん。大学のホームページっていうのはね、研究論文しか載ってないでしょ。研究論文見ても分からん人、面白くないわねえ。だから全然だめ。で、東京も大学しかないから、または大きな研究所がやってるぐらいのものだからね、面白くない。何も見るものがないんですよ。ありゃあこんなもんかね、と隣を見たらですね、パリのルーブル美術館が写真で見れる。え、こりゃ面白いじゃないの。で、もうちょっとクリックしたらですね、あれ、これ南アフリカの写真？ っていう風にね、世界の方がもっと身近に見れるんですよ。コアラにアクセスしたら、

コアラのとなりが世界だったわけですよ。日本はなかった。東京がなかった。まだそんなこと気がついてなかったから。だから、あらあ、大分の隣が世界なんだ、私達の隣が常に世界なんだ、といったことを急に気がつくわけですね。そしたら急に面白くなっちゃってですね、あちこち見て回る。で、見て回るんだけどね、やはりどちらかというとも情報提供型、私達ルーブル博物館はこういってことで展覧会をやってますとかね、こういった絵がありますとかね、私達の南アフリカはこういった景色ですよ、といった紹介型の、自分達を見せるようなものばかりだったんですよ。これはいつぞや渡った道という感じでしょ。

ということで、何かやり直さなくきゃいけないな、今のホームページなんて面白くないじゃないかといったことを感じる。そうやってたらですね、みんながそう言い始めちゃって、一人一人が自分の個人ホームページを作り始めちゃったんですよ。そしたら、あっという間に面白いことが始まってね。みんな自分のホームページを作る。例えば、湯布院が好きなね、永野ミエ子さんという主婦の方がおられるんだけど、いま54,5の方なんですけどね、その方はですね、湯布院音楽祭、いつもボランティアで手伝う、ちょうど湯布院音楽祭があるからとそのことを書き始めたんですよ。で、デジタル・カメラなんでもってないから、マウスでお絵描きしている。たどたどしい、クレヨンみたいな形で、これが湯布院の景色です。どれが木なんやろうかというようなんやけど、描いていく。で、描いていくうちに、だんだん絵がきれいになってくるんですよ。奥さんがそうやって書いたらね、今度は旦那さんがですね、それを英訳し始めたんですよ。奥さんが湯布院音楽祭のことをちょこちょこっと書いて、それを旦那さんが英訳する。そしたら、世界中からアクセスが来ちゃった。湯布院ってそんなところ、と。で、音楽祭やるの、面白いね、今度の音楽祭こんなテーマなの、いいねえと。是非とも行きたいねえ、と。で、ほんとにニューヨークから人が来ちゃったとかね。それだけじゃなくてから、その奥さんケーキ作るの好きだということ書いたら、ケーキ作るの好きか、と。じゃあオーストラリアのケーキ作るか、イタリアのケーキ作るか、と言ってね、世界から料理のレシピが送られてくるんだって。で、送られてくるから作らないかんから作って、そのころカメラがあったのかな。写真写して載せたんだって。そしたら、違う作り方が悪いって。で結局作り直させられてもう一回載せたんだけど。な

んか分からんけど変なことしてますわ。

こうして世界を相手に出来るといったところで勇気づけられるといった面白さが出てくる。面白いところに人が集まってくる時代になってきたんですよ。僕はそう思いますね。ネットワークというのは、従来は私達が住む社会というのは縦型社会でね、社長がこう言う、だからもう命令としてやらなきゃいけないとね。学長副学長がこう言うからやらなきゃいけないとか話が沢山あるでしょうが。ところがね、ネットワーク社会はそういった命令が効かないんですよ。ねえ。全然違う組織に属している人たちばかりだから言うこと聞かない。で、また同じ会社の中でこう言っても、社長が言ってること違うじゃないの、よそではこういうことやってるということをもみんな知ってるんですよ。前はね、情報を与えないことによって、自分の会社の情報だけを与えることによって、社長の威厳を保ってた、といったことがあるわけですよ。だけど社長威張ってもつまらんわね、なにも仕事しとらんくせにとかいうことがばれてしまうんですよ、今は。だから本当に重要なことというのがだんだんと違ってきてしまったということからね、会社の中の組織もそういう風に柔軟にすることが必要になってきたわけですね。で、じゃんじゃんじゃんじゃん、組織が変わってくる。

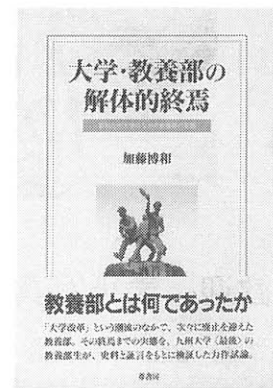
今企業で会社人間ですって言って雇ったら馬鹿にされるでしょ。私は会社人間だよ、だけどバイオリンがうまいよ、とかね。湯布院音楽祭で私はこれこれこういう風にちゃんと支援してるよといった、二つの肩書き、複数の肩書き、ボランティア精神とかね、地域社会に対して何かを持つ人達、または自分で技能を別に持ってる人、こういった方々、会社人間プラスアルファの肩書きを持っている人達が尊敬される社会になってきてるでしょ。それは面白さがあるからですね。こういったことが、公然と認められ始めた。しかもそういった方々がネットワークで結びつくということが分かってきたから、ますますそれが強くなっていくといったことになってきていると思うんですよ。どうもネットワーク社会というのはそういったことを前提にして組み立てられていくみたいで、二つの肩書きを持つためにネットワークを使う。ネットワークを使いながら、自分が知らなかった自分の魅力を探し出していく。さっきの主婦の人なんかまさにそうでしょ。っていう風なことになりそうな雰囲気があります。

(文責 数理学研究科 木塚 崇)

一 冊 の 本

この3月まで法学部の学生であった加藤博和さんがその卒業に時を合わせて著書『大学・教養部の解体的終焉—新制九州大学のなかの教養部の足跡』（葺書房）を出版しました。すでに新聞での紹介等もありご存知の人も少なくないことでしょう。内容は本学教養部の廃止（平成6年3月）をめぐる過程とそこにおける問題点を追及したものです。そのために加藤さんは資料入手に努力するとともに関係者からの聞き取りを行って精力的に調査を行っています。本の中には教養部廃止の時点における教養部長としての当事者であった私にとって手痛い批判も含まれています。また、出回っている資料だけからは知ることができないために、誤解にもとづく記述も一部にはあります。しかし、入手できる資料の制約にもかかわらず、深く事実を確認し、問題点を浮彫りにできていることに驚きます。学部の学生であっても集中すれば高いレベルの仕事ができることを示す優れた見本になっています。若くて経験が

少なくとも集中力は^{さまつ}些末な欠点の指摘などを寄せ付けない質の高さと迫力をもった仕事を可能にします。この本を読んで強く感じたのはそのことです。



学生の皆さんがこの本を読むことによって、それぞれが高い目標をもって挑戦する気持ちを奮い起こしてほしいと思います。

(大学教育研究センター おしかわ もとかず 押川 元重)

六本松地区教職員異動

(省略)



第22回 合宿共同授業 (4頁参照)

投稿歓迎, 表紙写真募集

- 編集委員会では, radix を更に豊かな「九州大学全学共通教育広報」にするために, 六本松地区の学生・教職員・非常勤講師の皆さんなどの投稿を歓迎します。大学や皆さんに関わること, 皆さんが関わっておられることであれば, なんでも結構です。
- 「六本松」にまつわる話, 関わる出来事などをお知らせください。編集委員が取材に参ります。
- radix の表紙を皆さんの作品で飾りたいと考えています。写真, 絵画, いろいろな趣味をおもちの方, 「作品」のカラー写真をご提供ください。周りにそのような方がいらっしゃいましたらご推薦ください。さっそく編集委員がお訪ねします。
- radix についてのご意見をお聞かせください。

投稿, 応募, 推薦先

radix 編集委員 岡野(言 文) 木塚(数 理)
 日下(比文) 小山(大教セ) 斉藤(健 セ)
 濱野(健セ) 深江(専門員) 山中(理学部)

六本松地区企画掛(本館1階奥)

または radix ご意見箱(六本松地区教務掛の前)

あ	と	が	き
---	---	---	---

9月13日から六本松キャンパスで言語文化部主催の公開講座が始まる。テーマは「インターネットの世界」で, 目下そのテキストの校正に追われている。図学の大月先生の原稿を読みながら, なるほどねー, と感心してしまった。将来インターネットが普及し, 金銭のやりとりから住民票まで, インターネットで処理できることはすべてインターネットを介して済ませるなら, 例えば, 車で住民票を受け取りに行く必要もなくなる。資源を無駄に使うこともなく, 地球環境にもやさしくなれる, というのである。つまり, 情報の道路と物流の道路, この二本の道路が生まれるわけだ。無論そこで, 樋口先生がテキストに書かれているように, 「高速通信回線の確保は今後のわが国の情報化にとって緊急かつ最大の課題である」ということになる。要するに大変な投資が必要になる。どうすればいいのだろうか。ここで再度大月先生に登場していただくと, 高速道路と新幹線の建設費を回せばいいらしい。むむ。大胆な意見ではないか! でも, そうかもしれない。

インターネットに関心のあるかたは公開講座に遊びにきて下さい。お待ちしております。(ssm 記)

radix(ラーディクス) No.14 (九州大学全学共通教育広報)

発行日 平成9年9月30日

発行所 九州大学大学教育研究センター

〒810 福岡市中央区六本松4-2-1

電話 (092) 726-4525・4526 (企画掛)